

# 空を見る

三木 紀人

仏像や仏画のようなものに接するためには仰角がふさわしい。伏目がちの仏を低い位置からあおぎ見るとき、他の角度からは決してうかがえない圧倒的な存在で大きなものがせまってくるようで、われわれは自分たちの小ささを知るのである。

ことは、空との関係についても同様であろう。せわしなく生きるわれわれは、視野の片隅に空をとらえつつ、それを意識することが少なく、天候の変化とか時間の進行に気付くためにその明暗などを注意するのがせいぜいである。しかし、その空を（できれば鮮かなそれを）しげしげとながめて、しばらく

対してみれば、突然その空がなつかしいような、したわしいようなものに変貌し、そのことによって日常的な気分からしばらく解放されるはずである。

その思いにひきずられすぎると、無力感とか厭世思想のようなものも生まれかねず、健全な生活のためには少々用心しなければならぬのであるが、時には、空を見ることによってよびさまされるものを味わってみるのはよいことであろう。

ただし、空への感性は誰にでもあるものかどうか。八木重吉『秋の瞳』巻頭の詩



息を 殺せ

息を ころせ

いきを ころせ

あかんぼが 空を みる

ああ 空を みる

などを讀むと、それは人間にとって本能的なもの  
ようにも思われるが、感性が形成される時期に、空  
に注意をうながされる体験があれば、その本人に  
とつての空の有意性は、よりゆたかなものになつて  
いくであろう。

例えば、歌手として知られる五輪真弓さんはエッ  
セイ「夕焼け」の中で、そのような思い出を語って  
いる。それによると自分は、幼いころのある日、た  
またま見た夕映えの空の強烈な印象に打たれ、それ  
からしばらく、夕空をながめるならわしを持ちつづ  
けたという。その結果について

その美しい夕焼け空に、私はいろいろな夢を  
描き、しだいにそれに魅せられていったのだ。  
そればかりでなく、私が生きている限り見守っ  
てくれるただ一つの守り神である、と信じるよ  
うになつたのである。

と記す五輪さんは、幼時に接したのと同じような空  
を旅行中に見て「戻りたくても戻れるはずのない世  
界」と再会したように思い、その翌日、この文章を  
書くことになつたのである。

現在の、特に都会の空は、子供たちがそこに夢を  
描くには汚れすぎていることが多く、また、彼らは  
何かと忙しく、空をおおぎ見るゆとりなどなかなか  
持てないでいるだろう。とすると、彼らは将来、空  
によつて過去と再会できそうもないが、では、空に  
代わる何かがあるだろうか。

(お茶の水女子大学)